



社会言語科学会ニュースレター 第 22 号 (2006 年 8 月 14 日発行)



- 《目次》
- [01] 巻頭言
- [02] 研究最前線
- [03] 第 18 回大会のお知らせ
- [04] 博士論文情報



学会活動の振り返り, 学際性の魅力を追求する

大坊郁夫 (大阪大学大学院人間科学研究科)

この3年間, 会員各位のご協力をいただきましたことに篤くお礼申し上げます。会員歴も短く, 社会心理学をベースとする私としては, 大きな戸惑いを抱きながらの会長就任でありました。その際に申し上げたことの一つに, 「コアとなる関心事に共通性を持ちながら会員の研究領域が多岐に渡っていることの利点を持ち寄り, 生かしていきたい。」ということがあります。いわゆる人文・社会系から理工工学系と幅のある関心領域—異文化とも言える—の研究者がこれほどに集っている場は他にはないはずですが, それぞれが育ってきた研究・教育背景が異なるので団体としてのコンセンサスは取りにくい面があります。しかし, 研究面で言うと, 狭い個別科学からでは見えにくい示唆が多方面から得られるというメリットは貴重なものです。その試みは, 大会時の特別講演, テーマ講演, シンポジウムやワークショップなどに見ることができます。参加者の反応からも会員相互がこの学会において関連する他領域から多くを吸収したいという姿勢が感じられます。また, 研究誌の特集企画にも, 異なる背景の研究を互いに尊重しようとした姿勢が見られます。これらの特徴は, この学会の設立趣旨を適切に継承していると言えます。それぞれの集団の凝集性を高めるためには, 共通する魅力的な目標が必要です。多様性は現状ではありますが, それ自体は目標とはなり難いものです。潜在する無尽蔵の研究パワーをどう生かしたらいいのか, 学会としての紐帯をどこにどう求めるべきかを改めて問い直す必要があります。同時に, この学会の活動が社会の well-being に生かされることを今以上に意識して, 「各人が研究の基盤として, 人を結びつけ, 適応的, 調和的な社会を目指すことをさらに謳っていきたいものです」(「社会言語科学」7巻2号, 2005年—巻頭言拙文—)。

なお, 会員数に比して1回あたりの大会参加者は決して多くありません。多少とも会員の活動の仕方に偏りがあるのでしょうか。近年は学会が多様に設立され, 重なりが多くなっていることとも関連しているかも知れません。大会の魅力度を高めるための工夫が常に考えられています。また, 学会の未来を語る会が毎大会時に開催され, 熱心に語られています。多様な試みを重ねてきておりますが, どう評価していただいているのでしょうか。

この3年間に, 理事会での議論を通じ, 学会運営上いくつかの工夫をして来ましたが, 多岐に渡りますが, 主な点としては, 1) 一部の会員(理事, 委員)への負担集中を避けるため, 事務作業の統一化を図るために, 長い準備期を経た上で事務委託を開始したこと(ま



において取り上げそこに存在する課題の解明を目指す」という趣旨にあるように学際性を謳った学会である。すなわち、どのような学問分野であれ、コミュニケーションを扱っているならばマジョリティになる可能性を秘めていることになる。その可能性を信じてこの原稿を書いている次第である。私のように非言語的行動を扱う研究では、心理学的手法の王道である質問紙調査や認知的反応の測定だけでは十分な知見を得られないため詳細な行動の分析が必要になるのだが、社会言語学会の大会に参加すると類似したアプローチを試みた研究がここそこに見られ、少しだけ“マジョリティになった気分”を味わえる。

上記の経験から、研究分野にとらわれず、コミュニケーションに言及した理論について学内の院生達と勉強することにした。非言語コミュニケーション論や異文化コミュニケーション論、機械論、社会的システム理論、相互作用論など扱う理論は多岐にわたる。そして、コミュニケーションに関連した心理学の論文を様々なコミュニケーション理論の視点から捉え直す作業をしている。もちろん、すべての理論で説明できる研究などありえないが、別の視点で読み解く努力をすることが、ややもすれば自分の分野の殻に閉じこもりがちな研究者の頭を柔軟にし、研究に広がりをもたらしてくれるのではないかと考えている。

目下の課題は自分の研究テーマを学際的な視点から捉えることである。それが社会言語学会の“正式なマジョリティ”として認められるために必要な条件なのではないかと考えている。

■□ [03] 第 18 回大会のお知らせ □■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

社会言語学会の第 18 回大会（北星学園大学）は、以下の予定で行われます。

【日時】 2006 年 8 月 26 日（土）、27 日（日）

【場所】 北星学園大学

〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西 2-3-1

<http://www.hokusei.ac.jp/>

交通：市営地下鉄東西線「大谷地」駅から徒歩約 5 分

- 招待講演
  - 「無文字言語のゆくえ ―北方少数民族言語はどう生き残れるか？」  
津曲 敏郎（北海道大学）
- テーマ講演
  - ・「言語行動の日韓対照 ―その成果と問題点―」  
生越 直樹（東京大学）
  - ・「会話の科学は可能か」  
伝 康晴（千葉大学）
- ワークショップ
  - ・「解放的語用論の展開に向けて：その基本理念と応用」  
企画責任者：片岡邦好（愛知大学）
  - ・「多人数インタラクションの多様性とダイナミズム―  
多人数インタラクションでは何が多くなるのか？」  
企画責任者：榎本美香（千葉大学/東京農工大学）
  - ・「新しい音声バリエーションの研究―  
日本における社会音声学の確立をめざして―」  
企画責任者：二階堂整（福岡女学院大学）

※ プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。  
<http://www.wdc-jp.com/jass/18/>

＜社会言語科学の未来を作る会 第9回集会のお知らせ＞

学会をより魅力的なものにするために、気楽な雰囲気のでわいわいがやがや話す会です。  
多くのみなさまのご参加お待ちしております。

日時：2006年8月26日(土) 懇親会終了後

場所：北星学園大学(懇親会終了後、懇親会場受付に集合)

主催：社会言語科学会企画委員会

■ □ [04] 博士論文情報 ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

今期はご連絡をいただきませんでした。博士を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150字程度)を事業委員会(jigy@jass.ne.jp(\*))までご連絡ください。ホームページ上で掲示させていただきます。

(\*）プログラムによるアドレスの自動収集を避けるため、@は全角になっています。半角にして置き換えてお使いください。

---

発行：社会言語科学会事務局  
E-mail: [jass-post@bunken.co.jp](mailto:jass-post@bunken.co.jp)  
URL: <http://www.jass.ne.jp>

